私の古典文学教育論

―戦後世代の国文学徒の歴史的性格―

古　庄　ゆき子

（一）

どこの大学の国文学専攻の学生にも大分以前からそういう傾向が現われて来ていると聞くから、全国的風潮と言ってよいと思うが、われわれの学校でも近年国文科の学生のほとんどが近代以後の作家、作品にテーマを求めて卒論を書くようになって来た。

現在来春の卒業のためにぼつぼつ用意を始めている学生の中には、正式にいって（古典文学と関連するテーマや作家を扱う学生はいるが）古典文学を取り上げるものは一人もいない程である。

本年より採用されている高校の改訂指導要領では、「現代国語」が独立し、古典や漢文よりはるかに多くの時間を与えてあるので、この「現代国語」で育った生徒が大学に入る頃は、もっとこの傾向は強くなって来ることが当然予想される。

これは商売上（？）から言えば、古典文学の教師であるわれわれにとっては全く憂うべき、嘆かわしい事態なのだが、われわれが嘆こうが嘆くまいが、そのようなわれわれの主観とは関わりのない、冷厳とした歴史の必然的流れといったものを私はそれに感じる。少くともわれわれ古典文学の教師の願望とか呪詛とかをもって押し止められる種類のものではなさそうだし、まして一時の流行などとじったものに見るのも間違いのようである。

（二）

これは若い世代が古い時代の作品よりも自分

の生きている時代の方により多くの関心を示して来たことの現れであろうし、逆に古典は、血縁のない、理解しにくいものになってしまった、という事でもあろう。かって古典学科の謂であった国文科において、古典から近代以後に学生が遠ざかったというのは、革命的出来事であるといってよかろう。それだけにその変化をもたらした原因のたゞ事でなかったことが思われる。

それは何であったのか。このような大きな変化をもたらすには社会の全生活内容をゆさぶり動かす何かが起っていなければならぬ。私はそれを一言に言って敗戦以来、日本が世界史的規模で異常急激な近代化を遂げたことだと考える。つまり内在的力をテコにしてなどという生ぬるさを許さず暴力的に行なわれつつある近代化への道に対応を迫られて、生産用具、生産様式はもちろん、言語が思想が、生活様式が、そしてもっと大きく人間のありようといったもの全般が急激に、暴力的に変化を余儀なくされている事の中で考えるべき筋のものだと思う。

（アンケート続き）

いずれを教授したいと思うか、又、その他特に教授したいもの及び各々に関する希望の理由

一、結果　解答したもの　六名（A・B・C・D・E・F）

Aの解答

(イ) 文学の持つ妙味　又、国文学に於ては手近に量多く、断言すれば文学の甘露味魔力故に興味がある。

(ロ) 日本の歴史が刻み込まれる含蓄において日本文学と呼ぶべきである

(ハ) 古典文学に興味がある、時代の流れによって、文学の変化が面白く特徴づけられており、又、意味深長なところが特に私の場合好きである。

(ニ) 古典を教授することにより、日本文学

そして「天照大神をテンニテルダイジンと読み、『大国主命』をダイコク生命という保険会社か」と聞くような世代が育って来た。彼らは自分達の生きている時代に関心を集中し、急激に変化する環境に適応することで、古典とは血縁の切れた人々であった。

考えてみると、戦前、少くとも敗戦当時くらいまでに国文学を専攻しようと志した人々は、その学問に入るに当ってほとんどの人がうたがうことなく古典研究を志したであろうと思われる。それには古典以外を学問と認めようとしないアカデミズムの規制があずかって力があったとしても、その人々自身の中にも国文学＝古典の等式がゆらぎなく定着していたという事情もあったのではなかったろうか。国全体とは言わないが、少くともその国文学という小さな社会では、美の基準、学問の基準の安定した時代といってもよい。それは、今の学生数にくらべたら、ほんの一握りといってよい数の学生であったろうが、それらの人々のほとんどが、疑う必要もない安定した価値観の下に国文学を修めていったと想像される。戦前とは、そういった世界・グループの生き得た時代であったと思う。

そういった人々には国文学という世界が、心情的につながっていた。例えば彼らの多くが、短歌や俳句、時に連句、随筆などの実作者であることを考えてみてもよい。（不思議に彼らは近代詩や小説の作者ではなかった）

彼らは芭蕉を知るのに、他者として屹立する彼としてではなく、風流人によってもうけられている俳諧の席へ出入りすることによって、皮膚感覚的に芭蕉の血縁者になろうとする。そしてそれが一応可能であった。彼等は古典の世界にちょうど暗闇でも手探りであるける長年なれたわが家の様な親しさで生きたのではなかろうか。それはある意味で「歩むべき道の地図を星空が眼してくれている」幸福な状態であったと言える。それは近代科学をうけ入れる事の少なかった国文学界という一種の美的心情的世界独特の対象へのせまり方ではなかったか。

私は今の大学生よりは古い世代に近い所に位置する者だが、こういった典型的戦前世代からすれば、戦後のどさくさの中で変則的勉強しかしたことのない事において既に羨望すべき堕落の徒にすぎないであろうし、生れながらにして国文学に心情的共鳴を感ずる事が出来なくなった所から出発せざるを得なかった時代のものであるという点において度し難い異安心であるはずである。

私の育った境遇によるのだろうか、不幸にしてへあるいは幸にしてかい私は既に国文学に入るに当ってなれ親しんだわが家に入るように、又、入る入らないという垣を意識しないですむ様な時代の人間ではなかった。

私は私のように、心情としてでなく、血縁のない他者として屹立する国文学に学問として立むかわねばならないような人間がいっ頃大量に出てくるのか知りたいと思っている。それは国文学か、近代科学の下に研究対象としておかれはじめる時代をさし示すと考えられるからである。

もちろん私などの前にその傾向ははじまっていたに違いない。そしてその様な流れの果に古典をとうとう自分の視野からはじき出してしまう世代が置かれてよいのではなかろうか。

彼らと古典は心情的に全くつながる所を失った他者として対する外つながり様がなくなったのだ。それはことばの上で。発想の上において人間のでき、の上で、典型的心情主義的国文学徒に比べたら全く異端でしかない様な私でさえ私自身書きはしなかったが、候文がまだあたり前の日常書簡に使われていた中で育っているために古典のことばも発想も若い人々よりはるかになじみ深いものであったことを考えれば、この世代は、私などの末裔でありながら同時全く新しいタイプの人々であると言わねばならないだろう。

もし仮りにこの中から古典研究者が現われるならば、それ以前の人々のやり方と全く違った視覚（例えば外国人が他国の文化に接するように

に）でなければ把めないであろうし、逆にそれが他者になり切れる事も十分可能であるとも言えるように思う。

それ以前の世代が心情的に分るために、外国人のように、対象を絶体としてきびしく測定するのに困難だったのにくらべて、依存すべき心情の一さいを持たずに生まれてきた彼らは、最初から対象の絶体を測定するに必要な論理的、学問的用意をしていなければならないわけで、誤解をおそれずに言えば、この方があやまたず対象に迫れる可能性は高いわけだ。

考えてみれば戦後の暴力的異常さをもって行なわれている近代化は、在来の人間の生活様式や生活内容を全く唐突な風に変えてしまったし、人間自身が引きさかれ、つきくずされするという不幸な荒々しさの中で進行したのだが、それを唾棄すべきゞ末世々だとばかり言うのは歴史の方角を無視したことばである。この荒々しい近代化をとおってこそ好むと好まざるとにかかわらず古典に対して他者でありうるという世代

古典の絶体を把えることの出来る可能性を持つ世代がようやく出現したのではなかったろうか。この意味はそう小さくないはずである。

もちろんあくまで可能性としてであって、彼らは、又、近代、現代というものの中に身ぐるみよりかかることで、これに埋没し足をからまれているらしい状況にあるので、かならずしも期待できるとは限らない。彼らが哭いとばした死んだはずの心情的世界が新しいスマートな形で復活する機をねらっているのに対応できると期待できるかどうか。しかしわれわれの生きている社会そのものが過去と未来をぶちこんでもえている歴史的混沌なのであってみれば、彼らには可能性を歴史的可能性として期待していいのではなかろうか。

少くともわれわれ彼らより古い世代の恣意によって、彼らを無学不逞のならず者呼ばわりしてみても、古典を最初から視野に入れていない彼らには何の関係も生じようがないし、問題は少しも生産的にならない上に、そういう教訓と

か批難とかは、しばしば無意識の中に自分や自分の世代の正当性を誇っているもので、反歴史的、保守反動になりかねない。学問を大切に育てようと思う人間はさけた方がいい種類のものであるように思う。

「日本人とは何か」「日本とは何か」という事を主観的にでなく科学的に、しかも反省的に把えうるのは、他国人との比較が科学的に可能になった時であろう。今までの国文学にあった心情的、情緒的、血族的日本人の自覚はしばしば国粋主義的であり、他国を侵略する口実を与えるものですらあった。それは他にも理由があろうが、主として自分たちのありよう、自分たちの祖先たちのありようを世界史的視野でながめることが少なかったという国文学界の特殊性に起因すると思う。

明治以後、日本は伝統が断ち切れて根なし草になってしまったという反省をよく聞くが、逆に、日本ほどへといっても、今外国と比較してみているわけではないが、伝統というか、因習というか、現代に生きる人間の目を曇らせ、そういったものがべったりとくっつき通しだった国は少ないのではなかろうか。

伝統というものは現在生きているものが、自分の前進のかてとして、自分の今のありようを否定する媒体として、過去のある時期、ある人間を想起する所になりたつものだと考えるのだが、日本に、とりわけ国文学界にあったのは、まるで祖先がえり、古い時代への直接的回帰といってよいものではなかったろうか。まさに死者に捕えられた生者さながらに。

その上わるいことに祖先がえりといっても、しばしばその「祖先」は二十世紀に住んでいる小市民的国文学徒のつくり出した矮小化された祖先で、決して歴史の正しい把握による客観的なそれでない場合もあったと思う。

やたらと若い世代の肩をもったようになったが、単に好ききらいでなしに、又、心情的道徳論でなしに、戦後世代の歴史的性格を考えてみることが、学問の伝統や教育の問題を考えるの

に欠かしてはならない事であると考えたし、われわれの世代と彼らをつなぐものを考える必要も感じたからである。

・世代論に片よりすぎた点は反省している。

（文学部講師）

（アンケート）

の歴史を語らしめ、現代日本青少年の思想の変化を計り、同時に過去に対する誇りと未来に対する希望を与える

Bの解答

(イ) 文学そのものに興味がある。自分の様々な問題を日本という国の中で考えるために国文学を通さなければならない。

(ロ) 日本文学がよい・国文学という呼称は近代的な表現でなく　古めかしく親しみがもてないが、日本文学という呼称は日本における文学というよりも、日本を国際的な世界の中の日本という観点から見ると広い巾をもった、そして将来にも通じる意味を持つものであると思う。

(ハ) 現代文学に興味がある。古典文学に対しては、文章のわずらわしさは感じないが、我々の生活に張りを持たせてくれるような魅力を感じない。今後世界がどう変るかによって文学も又、我々の生活の中に入って来、そのような意味で、現代文学の方に興味がある。

(ニ) 現代文を教えたい。古典に比較し、現代文の方がより生活的であるから、それを通して、自己の確立、確かな人間観を各々が持てるようにやりたい。又、文学はもっとも進んだ精神文化だと思うので世界文学のあり方などに目を向けたい。広い視野の中にあってこそ、はじめて自己の確立がなされると思う。